連載〈松山おもしろ人物伝〉②

愛媛考古学界の先覚者

鵜久森熊太郎の生きざま

元松山市考古館館長　大野　慶一

晩年の鵜久森熊太郎
（西田栄氏提供）

一、鵜久森熊太郎の人となり

考古学者、鵜久森熊太郎は、愛媛の考古学の先覚者であり、その独自の研究調査は、今もって学界で高く評価されており、とくに東予地方史の研究では彼の研究を抜きにしては考えられないと言われている。鵜久森とは一体どんな人物であったのだろう。

鵜久森は、明治十六年四月一日愛媛県温泉郡和気村字太山寺にて生まれ、太山寺の「経ケ森」にちなんで「経峯」と号した。子供のころより経ケ森へ登り、古墳で遊び、俗に「穴熊」とも呼ばれた。

明治二十八年、太山寺尋常小学校を卒業し、松山中学へ進学したが父との約束で海軍兵学校受験を志した。しかし受験に失敗し、中学を中退して上京する。上京したころの動静は詳かでないが、後に日本大学へ入り、ここもまた二年で中退する。このころ知り合った人類学者、鳥居竜蔵博士との出会いが、考古学への開眼となり、鳥居を通じ後に松山中学へ転任してきた犬塚又兵の知遇を得て、ますます考古学への道に研鑽するようになる。

鵜久森の生家は太山寺仁王門下に現存する

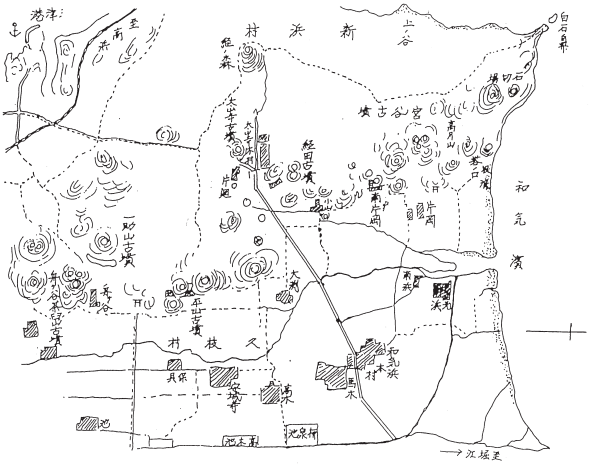
鵜久森は、書物による学問だけでなく、東大人類学教室や、京大考古学教室にも出入りし、専門家たちとの交流によって独りよがりの郷土史家には終わらなかった。

鵜久森は背の高い眼光鋭い大男であったと言われ、県内外を遍歴粗衣粗食に甘んじ、家族も顧みず橋の下を宿とすることを厭わず、考古学研究に精根を傾けた。

鵜久森は、考古学の先覚者であるが、考古学のみならず、人類学、宗教学にも造詣深く、欧米をはじめ西アジア諸国へも数回外遊し、内外の古代文化の紹介、究明、日本古代文化考古学の講師もつとめ、著書、論文も数多い。

二、鵜久森熊太郎の業績

彼は鳥居竜蔵から測量術を学び



備考　本図は昭和四年四月鵜久森熊太郎氏による報告書の附図である

のち小松の法安寺跡を測図して国史跡の指定に尽力している。また犬塚又兵から石器時代の遺物研究の手法を学び古墳石室等にも多くの論文を残している。

『伊予史談』にも「熟田津所在考」聖徳太子の「道後行啓と久米寺」等について寄稿している。

とくに郷里、和気に関しては、太山寺の古墳に興味を持ち、発掘調査をしたり『和気村史稿』に「同村古墳石室や遺物図」など収載している。

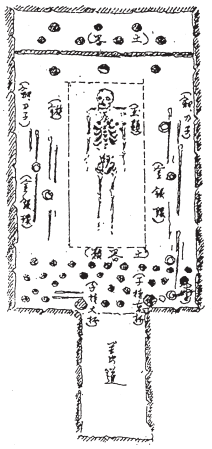
その外、昭和五年には「道後地方の遺跡・遺物」を人類学雑誌に

載せ、昭和六年以後、西条に逗留して、東予地方の遺跡遺物の調査に専念し、「奈良原山経塚」や「東予史研究の基礎問題」を発表している。同十三年には角田文衛著の『国分寺の研究』に「伊予国分寺」を分担執筆をしている。

また愛媛県史跡調査委員として愛媛県内各地の古墳の発掘調査をし古代文化考古展覧会の指導者として献身的に努力している。

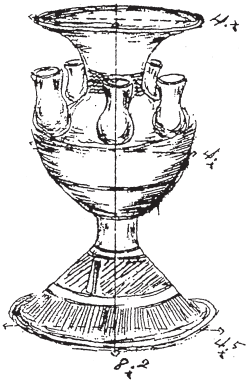
昭和四年には大三島の遺跡発掘更に岡山県内の神島・備中の古代遺跡発掘調査と寧日なく、高島・白石島・応神山等の史跡、名勝指定にも力を尽した。

昭和十五年には大島、大亀八幡に寄寓して藤崎古墳やその周辺を調査したり、『土』創刊以来、毎号土器の解説を担当執筆している。



昭和四年、鵜久森の和気地方の古墳調査報告書

昭和四年四月五日付報告書 宮ヶ谷第一号古墳の被葬者及副葬品配列見取図



宮ヶ谷第一号古墳より出土した祝部式土器「子持坩」

昭和十八年以降は、岡山県金光に逗留して、調査研究につとめ、その成果を『高島聖蹟写真帳』として刊行している。

遺著としては、**『佐方保及菊万荘』**という名著がある。

なお、彼のライフワーク**「伊予国分寺等の研究」**も完成に近づきつつあったことや、「瀬戸内海の史的研究」が大成されずに終わったことは惜しまれてならない。

鵜久森はこのように、県内はもちろん、県外、海外の各地をまるで放浪しているがごとくに足をとめ考古学を中心に埋蔵文化財の発掘調査にあたり、精細に記録に残し研究にあたっている。

三、鵜久森熊太郎の知られざる一面

今、彼は愛媛考古学研究の先覚者として、更めて見直されている。

彼の研究業績は前述した如く、地域は、東中予にわたり、時代は縄文期から弥生・古墳時代、更に古代・中世にまで及び、その論文著書は中央でも高く評価され、のちの研究者に多くの影響を与えている。

従来、定説として語られていた地方の歴史が、鵜久森の研究によって根底からくつがえされていることも多い。

しかし、鵜久森の活動範囲、事蹟については詳かでない面が多く随行して調査を手伝った人々の語り伝えで辛うじて知り得ることも多い。

執筆途中で、紙がなく、インキがなくなり、移動するにも汽車賃が足りなくなる等々、彼の物事に恬淡で無頓着さは数えきれないほど多い。宿がなければ、松の木の下で野宿し、雨が降れば橋の下で泊るという具合に、彼は常に「私は天上天下いずれのところにも住むことができるから家はいらぬ」と、語っていたそうである。

唯一縷の望みを托していた嗣子康が東京高等師範学校を卒業した直後、病死したことは、彼にとって痛恨の極みであった。

晩年、病気となり、昭和二十四年以降、岡山県小田郡の神島内村で療養に専念したが、後に岡山医科大学附属病院金光病院に入院し、胃潰瘍と肝臓瘍のため、同年七月二十九日に逝去。享年六十七歳であった。

彼の行動は実に多彩で、その活動も多方面に亘り、居所も常に定まらず、業績も不明の事が多く、詳細については未だ詳かでないことも多く、今後の研究に待つところが多い。

しかし、彼の残した業績は、愛媛考古学界にとって忘れることのできないものである。

〈参考文献〉
1 愛媛県史・資料編・考古
2 愛媛県史・人物編
3 愛媛新聞
（昭和四十二年十一月八日）
忘れ得ぬ人々(8)久門範政
4 愛媛新聞
（昭和六十二年七月八日）
鵜久森経峯の足跡
5 和気のおもかげ
（和気小学校創立八十五周年記念誌）